

近松と西鶴Ⅱ——七墓廻りをめぐって

CHIKAMATSU and SAIKAKU II: on Nanahaka-mawari

葛 綿 正 一

KUZUWATA Masakazu

本稿は「近松と西鶴——契約・説得・宙づり」（本誌一号、一九九七年一月）および「近松の時代物——双生・女夫・川中島」（同三二号、二〇一三年十月）の続編である。詳しくは前稿を参照されたい。引用は新古典大系および近松全集による。

1

ここでは西鶴『諸艶大鑑』（別題『好色二代男』、貞享元年）巻四の三「七墓参りに逢は昔」と近松『賀古教信七墓廻』（上演年月未詳）を比較してみたい。ともに七墓廻りを扱っているが、『諸艶大鑑』巻四の三は落ちぶれた男が、七墓参りをして遊女の亡霊に出会う話である。

親仁の手前、八十三度の詫事も、元の木阿弥、藤は松につれてゆがみもなをらず、あたら春を過て、今となつて、合点がゆけど、六年おそし。（中略）南中嶋によしみ有て、長柄の橋本寺の跡ふりて、塚もすかれて、年貢地と成片陰かたかげに、玉笹たまざさなど切敷きりしきて、むすめば柴の庵、くずせば元の野原、夢のかり枕もなく、小鍋壺こなべつに盆式ひんしき枚、是でも埒あきのあく世やと、蚊かひの団うちわをたのしみ、念仏の替りに、「なげきながらも月日をおくる」と、調子違ひの小哥、三味線にあはしやうともおもはねば、人にきいてももろふまじ。（『諸艶大鑑』巻四の三）

西鶴における父親の優位（「親仁の手前」、数字による奇妙な論証（「八十三度の詫事も…六年おそし」）、変わり映えのしないシニシズムを指摘できるだろう（二元の木阿弥…ゆがみもなをらず」）。塚は畑となり、庵は野原となって、

夢も消え果てる。歌舞音曲も無感動しか生まない。

女郎の仕掛を見出し、揚屋も見えぬ客の内談をたのみ、遣手も気に入貌かほをして見せ、町からの友も萬のさし図を請うけ、此里の男達の若ひ者も、おのづから近付になり、東西の門番も声を聞しり、物やらぬ末社まつしや迄もつきしたがひ、口拍子の万六、舞まいの惣太夫、此所の物もらひ、犬も見しりて、とがめぬ程になりて：〔諸艶大鑑〕卷四の三論証に長けた男は女郎の手管を見破り、揚屋から相談され、遣り手に氣に入られ、町から来る友達に指図していた。「犬も見しりて、とがめぬ程になりて」とあるが、馴れきつて犬に吠えられないというのが西鶴のシニシズムなのである。落ちぶれた男は「同じ着物」ばかり着て、つまらない話を繰り返した挙げ句（「人もおもしろからぬ落しの咄」）、無常の焼き場を廻ることにする。

野鳥の鳴も耳にかからず、軒の風鈴ふうりやうの不落離ぶらりと、日数の過るもよしなしと、無常野の焼場を隔夜してまはりけるに、有時吉原の墓より、酒のかほりふかく、六十余のせい高坊主たかぼうず出て、「我仏躰ぶつたいを得ながら、浮世に思ひ残すは、三升入の吸筒有あり。是を手向よと、御しらせ給はれ」といふ。「御身ごみいかなる人」ととへば、「葉箒はばうき葉箒」と、売声うりこゑばかりして消ぬ。ある夜又、道頓堀の火屋に、一寸法師の夏書げきして居を、心を留て見れば、甫春也。

〔諸艶大鑑〕卷四の三

「風鈴」は近松的な宙吊りの物体と違って情動を揺り動かすことがない。「日数の過るもよしなし」と考える男は算用を氣にしているのであろう。「六十余のせい高坊主」と「一寸法師」の組み合わせは機知的な構図である。「三升入の吸筒有。是を手向よ」とはあまりに具体的な数字の要求だが、西鶴の「浮世」は具体的な数字によつて成り立っている。また、一寸法師の正体は見世物小屋の小男であつたという落ちが付く。

雨の夜に現れたのは欲情をかき立てる女だが（「分有姿、後世を忘れ、いな事に心はなりぬ」）、奇妙なことに炭俵を提げている。

「でもそもけいせいとなる事、其身いたづらより是にはならず。大かたは親の為ぞかし。公儀十年と申は、水揚の日より定めぬ。勤めは姉女郎に引まはされ、万よろづのあてがひは親方より、先太夫まつは、はじめ式年が間、毎日伽羅二焼、奉書五枚、中折半帖、封じ紙三枚、のべ紙五折、楊子三本、月に雪踏一足、草履三足、蠟燭、禿の仕出し

迄も、内より拵へぬ。四季の衣装も、正月には上着かた三つ、下着二つ、ほりとり慘取の木綿着物三つ、四月に袴三つ、五月に帷子三つ、単物ひとつ、七月に帷子三つ、明衣ゆかた三つ、九月に着物三つ、仕立直し物三つ。それより下位次第に、万事の違ひあり。天神に壹年、かこひに半年、見世の女郎には三十日、諸事を内よりまかのふ事、心やすきほど、客もはやくつく物也。禿かぶろに髪結す迄も違ひはなきに、太夫の禿は、月に貳百、天神百、かこひ六十、つばねの禿は三分、かやうに替るなれば、位になる程、身持のむつかし。二とせすぎて、銘々さばきの身となれば、着類の外は手もめとなつて、色あげの染賃、糊の銭まで、勤うちなれば、もらはひではならず、くれる男は稀也」と、泪を流して申。聞てひとつもやくに立ぬ事也。

〔『諸艶大鑑』卷四の三〕

新町で太夫と呼ばれていた女によれば、傾城になるのは個人的志向のせいではなく、親のせいである。遊女には制度というべきものがすでに定められているが、それは数字によつて進行していくものにはかなならない（『毎日伽羅二焼、奉書五枚、中折半帖、封じ紙三枚、のべ紙五折、楊子三本…』）。もつとも、女の語りに役立つものは何も無い。「聞てひとつもやくに立ぬ事」が西鶴のエクリチュールを構成しているのである。

「さて持たまふ炭こそ不思議」と申せば、「過つる十二月雪の夜に、相果る時迄、此炭の口をあけずに、浮世に残すを、惜まれし一念の、手はよこれでもはなさず」といふ時、さまさまの女の首が飛来りて、彼遊女の身に喰付て、さいなむ。「是は情なし。をのをの亭主の、たわけにて、身上のつづかず、地黄丸のまるるを、我がしつた事か。身は売物にて、人をたらずがもとでなり」と申せば、ばつと消て、礼場の朝風、茂りの草ぼうぼうと、石仏はありしままにて立歸る。あらこはやの。

〔『諸艶大鑑』卷四の三〕

遊女が炭俵を提げていたのは、心中の際に未練が残ったせいらしい。「手はよこれでもはなさず」というのは金銭に対する執着に等しい。燃えることのなかつた炭は使われることなく死蔵された金銭に等しく、汚すだけである。そのとき様々な女の首が飛んで来て遊女に食いつく。「身は売物にて、人をたらずがもとでなり」と遊女は本音を語っているが、遊女は遊女であるというトートロジーでしかない。「あらこはや」の結語は見え透いていて虚しい。

次に『賀古教信七墓廻』を読み進めてみよう（一）。先妻の子、孝房と後妻の子、教信の物語は、材木を運ぶ船の難破から始まる。長男は契約的な存在といえる。神仏との契約によって生まれた申し子だからである。難破の知らせを聞いた賀古教孝は「アア思へば仏の咎め程おそろしき物はなし。我前妻に子種たねなく、摩耶山まやさんの觀世音に願をこらし、一子をあたへさづけ給へ、出家せさせて夫婦産まざる業をほらし、仏恩を報じ奉らんと誓ひてもうけし申し子成を、寵愛にほだされて出家になさんいとほしき、月日ものびて成人し仏の契約たがふのみか、嬪をむかへて孫迄見て民部ノ省孝房と、家督にたてし此偽ひととせ母が死したるも、罰とは知れど親心、やみにはあらで子にまよひ、兄を出家にせぬからは後づれの子の花二郎、せめて法師にせん物を」と泣いているが、近松の父親は無力である。それに対して、母親は恐ろしい。後妻は自らの息子を跡継ぎにするべく、前妻の孫子を亡き者にしようとする。

継子を四海の波にしづめ、みづから自に一念の鉄の牙をつけてたべ、残る継嫁二人の孫を食ひころし、死骸を神の御供となし我子を家督に立給はば、四季に四度の人神御供みごころそなへ祭り奉らん、目前利生を見せ給へと古木をたたき岩をふみ、をどりあがつて祈りしは身の毛もよだつ、計也（中略）有つる蜘蛛はたちまちに継母と化けして行月の、影もほのかに晴れてげり。（第一）

土俗的な本作には古浄瑠璃のエネルギーが流れ込んでいることが指摘されるが（渡辺保『近松物語』）、蜘蛛がその象徴であろう。蜘蛛となった継母が孫娘を食い尽くす場面は恐ろしい。

祖母さまいとしと首筋に、抱き付てあまへしは、あやうかりける次第也。継母にこにこ笑顔して、ヨヲよふ抱かれたでかいたな、とてもものことにべべ脱いで祖母がほほにいだかんと、我も大肌ずんとぬぎ千寿の姫帯ほどぎ、衣ひつはいで裸か身を両手に取つて差し上、いたいけざかりの花のかんげせ、かしらを口にをしこめは、口耳ぎは迄きれあがり肩もかひなも一口に、血をすひ呑んだる其いきほひ、いたはしや姫君は、足をちぢめ苦しみしは目もあてられぬ風情也。（第二）

「あれ、なふ、千寿の姫は祖母ごせにくひころされた」と兄の光明丸は騒ぐが、その傷はいつまでも本作に刻み付けられている（「祖母さまにかまれし傷がいたんで血が垂りて、よの子どもがよせつけず……」）。千寿姫を飲み込んで、

その姿に変身した蜘蛛は、さらに光明丸を追い回し、背中に負われ執権中務光秀の妻を噛み殺す。

実父が闇討ちで殺されたことを知った教信は、仇を討つため旅立つ（「さくら祭文」）。興味深いのは中山寺の場面である。孝房の妻が殺されると、亡骸から子供が生まれ、妻の亡霊は男の亡骸に取り憑く。したがって、男による出産のようにみえるのである。

かく浅ましのうぶやしなひ誕生は仏に似て、餓鬼道のみなし子かや母が肌にはつけず共、お乳乳母にもいだかれず、行衛もしらぬ男の死人の体をかり、いだけばさすが玉しひは親子と知つたるしにや、冷へちぎつたる亡者の肌もつじやに母と思ふていだけ付。アア命有ならば母が誠の肌につけ、悦ぶ初声聞くべき物をはかなき親子のちぎりやと、嘆けばうぶ子も聞入れてやわつと叫ぶをゆりすかし、ゆりすかしては我も又、ともに涙の中山寺たどり、行こそあはれなれ。

(第二)

孝房の妻が乗り移った男こそ、教信の仇であり、いまや敵と味方は区別がつかない。「病中手足も立たず」とあった友風は、男性性を奪われて、すべての媒体になっている（そもそも実父の仇は高梨友重であって、息子の友風はその身替りにすぎない）。

孝房は傾城の宮城野に入れ上げ公金を使い込んでいたという。出家して真光と呼ばれる光明丸は傾城を買えば救われると思ひ込まされ、僧物を盗み続ける。真光の七墓廻りはいわば地獄廻りの道行だが（「夏野のまよひ子」）、それでも地藏菩薩は掬い上げてくれる（鉢たたき）。ここにも説得と宙吊りを見て取ることができらるだろう。

兄に代わって出家する弟の賀古教信という名前は、過去を背負った信仰の証しになっている。結末に「末代姪女のためしなき、五濁じよくのくもり晴れそめて、玉とあざむく萩の露、宮城野をこそ押しけれ。同声どうしやう念仏大空にひびきわたれる雲の上、北の方の靈魂千寿の姫をかきいだけ、継母おなじく秀光が妻卯ノ花まのあたり、影のごとくにあらはれしは幻、ならぬ現なり」とあるが、近松の七墓廻りにおいて女たちのユートピアが出現する。それは西鶴においてはありえない事態といえる。

ところで、鶴屋南北の合巻『復讐愛高砂』（文化六年）は近松の『賀古教信七墓廻』を書き換えた作品だが（服部幸雄『さかさまの幽霊』ちくま学芸文庫、二〇〇五年）、近松にはない要素が付け加えられている。それは地獄の亡者の盆踊

りというグロテスクなカーニバルである。紀海音『小野小町都年玉』（正徳三・四年）にも七墓廻りはみえるが、それは早魃の最中になっている。

注

〔1〕 横山正『近世演劇論叢』（清文堂出版、一九七六年）第二部Ⅲが本作と古浄瑠璃の前後関係を論じ、井上勝志『賀古教信七墓廻』の上演年代」（『近松浄瑠璃の史的研究』和泉書院、二〇一三年）が歌舞伎との関連を論じている。

〈キーワード〉 西鶴、近松、七墓廻り

〈要旨〉 本稿は七墓廻りをめぐって、西鶴と近松を比較したものである。それぞれの特質が明らかになったかと思う。

補論 主要作品案内——井原西鶴

本論「近松と西鶴」を補足するために主要作品案内を掲げておく。

『好色一代男』（天和二年十月）は八巻八冊。生野銀山の富豪夢介の一人息子世之介の好色生活を描いた五四章の一代記である。巻四に至る前半で全国の遊女を描き、巻五以降の後半で古今の遊女を描く。最後に女護嶋をめざして船出するが、制度の外に出ることはできないようにみえる。

『諸艶大鑑』（別題『好色二代男』、貞享元年）は八巻八冊。好色一代男の遺児世伝が初夢から目覚め、島原の正月買いに出かけ、諸国の色里の「諸分」を聞き書きしたものである。様々な事情、作法、費用を意味する「諸分」こそ西鶴の世界を的確に要約する一語であろう。女の心を試し、それでも疑いをやめない（巻五の三）、女の情けがかえつてうとましくなる（巻七の四）、それが西鶴的な存在である。

『腕久二世の物語』（貞享二年二月）は二巻二冊。大坂堺筋の腕屋久右衛門の一代記で、上巻七章には豪遊ぶり、下巻六章には零落ぶりが描かれる。破産し孤独のうちに水死するという点に制度の苛酷さがうかがえる。西鶴によれば、

椀久の水死は貞享元年一二月のこととされる。

『好色五人女』（貞享三年二月）は五卷五冊。巻一は姫路但馬屋の娘お夏と手代清十郎の密通事件、巻二は大坂の樽屋おせんと麴屋長左衛門の姦通事件、巻三は京の大経師女房おさんと手代茂右衛門の密通事件、巻四は江戸の八百屋お七の放火事件、巻五は薩摩のおまんと源五兵衛の恋愛・心中事件を描く。

『好色一代女』は六卷六冊。老女の懺悔を記した二四章の一代記だが、主人公が様々な職業を転々とするので、職業のカタログのようにみえる作品である。父親の負債のせいで遊女になるというところに父親の役割がうかがえる。

『男色大鑑』（貞享四年一月）は八卷十冊。前半は男色の話を集めたもの、後半は歌舞伎役者の話を集めたもの。いわば制度の内側で偶然に翻弄され続ける姿を描いている。「芝居子の一座に用捨すべきは年せんさくなり」とあるが（巻七）、穿鑿するのが西鶴の文章といえる。

『嵐は無常物語』（貞享五年三月）は二卷二冊。美貌の名優嵐三郎四郎が同四年一二月に若くして割腹自殺をした事件を描く。上巻は最期の物語、下巻は後日の物語である。「おもわくのほかなる義理死」というが、不用意な一言が人を死に追いやる点に制度の苛酷さがうかがえる。

『色里三所世帯』（貞享五年）は三卷四冊。京の東山岡崎に若隠居した浮世の外右衛門という金持ちが三都に三つの世帯をかまえ、あらゆる色遊びを尽くすが、女が妊娠出産するとたちまち追放してしまうという点に西鶴の世界がうかがえる（皆々かたつけて…）。

『好色盛衰記』（貞享五年）は五卷五冊。『源平盛衰記』を模して「祇園悪所の銀づかひ、諸わけ無情の男あり」と始まる本作は、全二五話で好色世界における栄枯盛衰を描く。巻頭で乳飲み子の遊興を取り上げ、巻末で臨終間際の老人の遊興を取り上げている。

『椀久二世の物語』（元禄四年）は『椀久一世の物語』の続編。地獄の責め苦がきわめてサディスティックである。「釣鐘背中に落ちかかり骨をくたき」とあるように、釣り鐘が宙吊りの物体として響き渡ることはない。

『浮世栄花一代男』（元禄六年）は四卷四冊。隠身の花笠を授かった主人公が、隠れ笠の忍び之介と改名し、諸国の好色を見聞する。

『西鶴置土産』は没後の第一遺稿集で五巻五冊。全一五話で遊興に入れ上げて没落した男たちを描く。「長者に二代なし、女郎買いに三代なし」(巻一の二)とあるように、置き土産を継承するのは実は困難といえる。はたして受け取れるのか受け取れないのか、そんな置き土産のパラドクスが本作には見て取れる。結末の「望の献立」は目で味わうことができて、口で味わうことができないからである。

『武道伝來記』(貞享四年四月)は八巻八冊で全三二話。「諸国敵討」の副題をもち、全国各地を舞台として敵討ちを描くが、悲願成就の喜びは乏しい。むしろ敵討ちという制度の虚しさばかりが際立つ。「先づ本望達したりと、うれしきばかりにて、次第に弱りはて…」とあるが(巻三の三)、本望を達しても破滅するしかない。

『武家義理物語』(貞享五年二月)は六巻六冊で全二六話。武家の義理を描くが、本作が造型性に乏しいのは義理の論理性ばかりが優先されているからである。巻二の四には息子を殺した男を養子に迎える話がある。「両方の小者は、相打ちして、空しくなりぬ」とあるが、こうした虚しさの上に義理の関係が形作られている。挿絵には墨の吹き出した無数の死体が転がる。

『新可笑記』(元禄元年十一月)は五巻五冊で全二六話。仮名草子「可笑記」を借りて、武家教訓書の体裁をもつ。「義を重んじて命を軽くするは義士の好める所なり」という言葉を引用するが(巻一の二)、近松と違って、この苛烈さは恩寵や救済に至ることがない。また「我が身の外世の事に構はねば、何か気に勞する事なく、おのづから命を延ぶるの得あり」という言葉を引用するが(巻一の五)、「世の事」に関わり合って、たちまち生命を破滅させる。本作は「仕置き」の苛烈さを浮き彫りにしている。

『西鶴諸国ばなし』(貞享二年一月)は五巻五冊で全三五話。「世間の広き事、国々を見めぐりてはなしの種をもとめ」た雑話集。序文に「世にない物はなし」とあるが、その同語反復が注目される。あるのかないのか、同語反復が様々なヴァリエーションを作り出すからである。小判十枚は十枚のままであり(巻一の三)、焼かれた「黒木」の死体は墨染めとなり(巻三の三)、金を拾う男は拾うのであり(巻五の七)、同語反復的事態を迎える。結局、「因果のぬけ穴」から脱出することはできない。

『本朝二十不孝』(貞享三年十一月)は五巻五冊で全二十話。二十四孝をもじって不孝の話を集めているが、逆に親の

専制ぶりが明らかにされる。

『懷硯』（貞享四年三月頃）は五卷五冊。半僧半俗の伴山による回国見聞記という設定である。その「くきみじかき筆」は、せつかちで無愛想な西鶴のリズムに対応している。詰将棋を解いた途端に頓死する男、遺産が手に入らず失望する男女にみられるせつかちさであり（巻二の一）、財産目当てに婿入りし、石と瓦を銀箱に詰めた見せ金に失望する男の無愛想さである（巻五の二）。

『本朝桜陰比事』（元禄二年一月）は五卷五冊で全四四話の裁判物。三五歳の男と一五歳の娘の結婚に親が年の差を理由に反対するが、あと五年待てばちょうど半分になると裁きを下す（「待てば算用もあいよる中」）。じつくりと待つことなく、こうした算用を採用するのが西鶴の論理である。

『西鶴俗つれづれ』は第三遺稿集で五卷五冊。酒と色に関する話が多い。巻一の一は「過て克は親の異見悪敷は酒」の話であり、過剰な親の意見が注目される。巻二の一は吝嗇な父親による金銭の詮索から息子の遊興が発覚する話である。西鶴は落とした金を搜索せずにはいられないのである。そのため「吉の字極印」から息子の盗みが明らかとなる。序文に「彼吉田の題号をかすめとりて俗つれづれくさと名つくる」とあるが、はたして『徒然草』の続編なのか俗編なのか、そんな「俗」のパラドクスが本作には見て取れる。西鶴はまぎれもなく吉田兼好から掠め取っているからである。

『万の文反古』（別題『西鶴文反古』、元禄九年）は五卷五冊。全一七話から成る書簡体の小説。「見ぐるしきは、今の世間の状文なれば、心を付て捨べき事ぞかし。かならず、其身の恥を、人に二たび見さがされけるひとつ也」と序にあるが、これらの手紙は当事者同士の間でやりとりされた後、第三者の目に曝されたものという。つまり、西鶴の遺稿と同じような様相を呈している。反古として捨てられたものが、もう一度日の目をみるのであって、西鶴のテクストとは二度曝されたものなのである。

『西鶴名残の友』（元禄十二年四月）は第五遺稿集、五卷四冊で全二七話。諸国の俳人の逸話を集めたものである。「みづから筆を染ぬれば、故人にあふところばせして、篋底に籠置、折ふしごとの寢覚の友とす」と北条団水は序で述べている。しかし、はたして友なのか友でないのか、そんな友のパラドクスが本作には見て取れる。結末の「入れ歯」

は友を遠ざけたり近づけたりしている。

『日本永代蔵』（貞享五年）は六卷六冊で全三十話。「大福新長者教」の副題をもち、三都を中心に羽前坂田から肥前長崎を舞台として、いかに蓄財するかが描かれる。巻六の四に「身代固まる淀川の漆」の話があるが、粘着質の物体で固めたはずの財産もたちまち分散している。

『世間胸算用』（元禄五年一月）は五卷五冊で全二十話。「大晦は一日千金」の副題をもち、江戸、堺、奈良、長崎、伏見などを舞台として、大晦日の借金取りからいかに逃れるかが描かれる。巻五の二に「一升入る柄杓へは一升よりはいらず」とあるが、このシニシズムから西鶴は逃れることができない。

『西鶴織留』（元禄七年三月）は第二遺稿集。六卷六冊で全三三話。団水の序によれば、巻一・二は「本朝町人鑑」に予定されていた原稿で九話、巻三以降は「世の人心」に予定されていた原稿で一四話から成る。織留とは物事の終わりのことだが、はたして終わっているのか終わっていないのか、そんな織留のパラドクスが本作には見て取れる。「それそれに奢分散しまひに成事程なし」と「子の代に金銀の置所なきたのし屋とそ成ける」の二つの結末が用意されているからである。

（二〇一三年十月稿）

【訂正】

本誌四一号九一頁四行目「懺雑」↓「懺雑」、一二二頁一八行目「船寄」↓「船籍」、一二三頁一二行目「警討双六」

↓「雙討雙六」

本誌四七号一三頁七行目「酒宴」↓「酒醺」